

IN LOVING MEMORY OF RITA

en arriv
our tourn
iques »,
et Jac
au do
ans ses
los de n
de sani
jecté d
être à
« messik
ers » dé
nt Irving
ccoli, le
film, et t
n de la
Autan
magné
à l'épo
de jeune

望 望 鄉 森 瑶 子

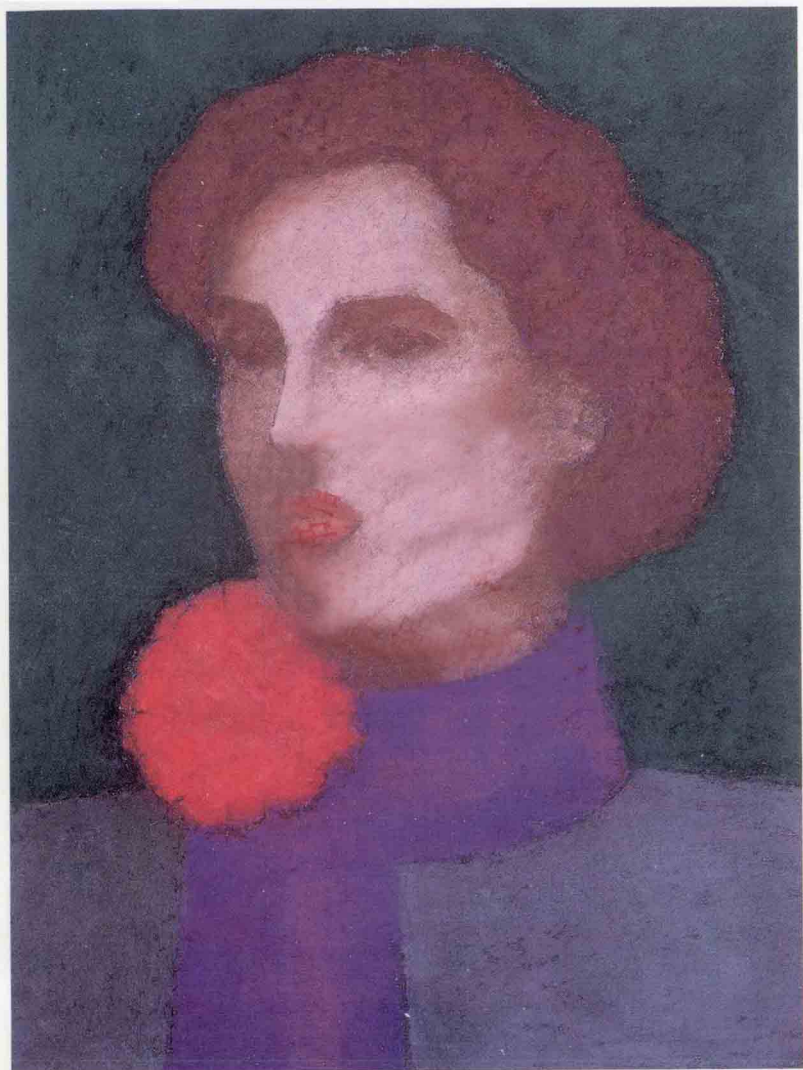
coup trop parlé
dont il ne se
coupable.
Coupable, il lui
tant de l'être. É
de la tequila ou
pouvait être od
nière dont il pr
exemple, le m
n'était pas tou
Sa prédilection
non plus. Mai
l'énigme de
contradictoire,
térionisée, es

Mitchum se
nonça qu'il
site à l'acte
limitée à d
déroulerait
le bureau
centre pénit
ner et une
niers consi
quartiers. L
était en ret
portait de b
de Hollyw
avait été bi
pas se dér
plissement
rentrerait la
lywood. Hu
aussi qu'il
49 500 dolla
qu'elle acqu

neur d
deshu
trouve
la Ma
ix de
une c
enfil
s'ouv
ra. se

as, l'alchimie
er, c'est tromp
ors certains lo
ifs, d'autres ins
m sur le Mor
el, d'autres en
is il y a ceux

il se tr
: toujo
ut part
petit paquet d'heri
siques joints. Recon
ces jeunes gens
optaient sa démarc
roupée, les collègues



望郷

定価 一三〇〇円

一九八八年六月一日 初版発行
一九八八年十一月五日 第二刷発行

著者 森 瑤子

編集 甘利 信二

編集協力 一寸 社

編集人 細川 正博

発行人 高木 俊雄

発行所 鉄学習研究社

東京都大田区上池台四一四〇一五

郵便番号 一四五

電話 編集〇三三七六―八三二五

販売〇三三七六―八一五八

振替 東京八一四二九三〇

印刷 信毎書籍印刷株式会社

株式会社 美術版画社

© Yoko Mori Printed in Japan 1988
168 711 ISBN4-05-102793-7 C0391

*この本に関するお問合せや落丁・乱丁などありましたら、文書は
東京都大田区上池台4の40の5 (〒145) 学研お客さま相談センタ
ーへ、電話は東京 (03) 726-8124 へお願いいたします。
*本書内容が無断で複写・転載することを禁じます。

望
郷
目次

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

第一章 カウン家の三姉妹

5

一 カーカンテロフの春 7

二 恋の予感 44

三 悲しみの夏 73

第二章 黒い瞳 111

一 運命の出合い 113

二 もうひとつの死 138

三 仲たがい 164

四 新生活 188

第三章 ミセス・タケツル

213

一 異国へ 215

二 喪失 247

三 夫、政孝を訪れた紳士 275

四 養女サラ 301

五 里帰り 328

第四章 試練 347

一 第二の故郷 349

二 沙羅の出走、そして試練の日々 369

三 リタの結論 391

エピローグ 429

このストーリーは、竹鶴リタの伝記を参考にしたフィクションである。

第一章

カウソ家の三姉妹

一 カーカンテロフの春

ゆっくりと眼覚めていく過程で、彼女は鼻をひくつかせた。今朝は何かが違っている。空気が、香りが、そして温度が――。

眼を閉じたまま息を深く吸いこんで、満足の吐息とともにそれを吐きだした。季節が変わったのだ。眠っている間に。

昨夜のうちのどこかで、冬のごえた青白い手が、バラ色の春の精の手に、季節をバトンタッチして立ち去ったのだ。ついに、長い灰色の冬が終り、誰もが待ちかねていた春がスコットランドにもやって来たのである。ロンドンよりも二週間も遅れて。南のデボン地方では、ひと月近くも前に、とつくに桃の木やツツジやサツキの花が咲き始めたというニュースが新聞に出ていた。

毎年、春の訪れを彼女は誰よりも早く察知する。なぜなら誰よりもそれを待ち望んでいるからだ。そこで、温かく軀を包んでいた羽根ぶとんからそとすべり出て、彼女は南側に面した窓のカーテンを左右に大きく開いた。

グラスゴー郊外の小さな街、カーカンテロフの家々は、まだ完全に眠りから覚めてはおらず、^{あかつき}曉の最後の灰白さの下でしんと静まりかえっていた。

比較的高台にある彼女の家の南向きの窓からは、灰色の街並みの一部と、スコットランド特有

の低い丘陵きやうりやうの広がり、それに続く黒々とした森が一望のもとに見渡せる。

冷たい窓ガラスに白い額を押しつけて、彼女は黒っぽいゴースの繁みに覆おほわれている丘陵を眺め、遠い森と、その背後に横たわる低い山々の紫色の輪郭りんかくとに眼をこらした。

昨日と何かが違うだろうか。春のしるしがどこかに刻まれたのだろうか。一見何も変わっていないように見える。ゴースはあいかかわらずごわごわと固くちぢこまり、森の樹々は裸はだかであった。

しかしやがて、あの丘陵一面にヘザーの紫色の花が咲き乱れ、まるでラヴェンダー色のカーベットを敷きつめたようになるのだ。

すると、どこからともなく小鳥たちがヘザーの繁みや、柔らかな新芽をつけはじめたゴースの間から、囀さえずりはじめる。

小さな小さな駒鳥こまどりが、繁みの中からまっすぐに天にむかって飛びあがり、あまりにも高くまで舞い上がるために人間の眼には見えない空のどこかで、ヒンカラララと澄すみきった高音で鳴くのである。その頃になると、羊たちが子を孕はらみ、やがて初夏になるとあちこちの牧場でそれはたくさんさんの小羊が生まれるのだ。

彼女は息苦しいほどの期待のために、躰からだがぐらぐらするのを感じて、思わず窓枠まどわくに手を置いた。そして眼を閉じて、興奮が鎮しずまるのをじっと待った。彼女は待った。めまいが去るのを、気分が落ちつくのを。そのように、いつも何かを待っている。これまでの十七年の人生は、そうやって常に何かを待ち続けることで流れて行ったような気がする。

さしあたっては、めまいが去るのを待っているけれど、いつか体質が変わって下の二人の妹たちや弟のように健康な躰になれることを願って、ひたすら待っている。そして妹たちのように学

校やカレッジや大学へも行けるだろう。家庭教師に家へ来てもらって勉強を教わるのではなく、自分から出かけて行って、広々としたキャンパスの中を駆けていくのだ。

そして今朝、空気の中に春の香りを嗅いで、カーカンテロフの郊外が春の色に包まれるのを、待ちきれない思いで待っている。

しかし、その朝、彼女の胸の泡立ち^{あわだ}は長いこと収まらなかった。いつまでも胸の動悸^{どうき}が高鳴ったまま、苦しいというよりは切ないような気がした。鼻の奥に香しい^{かぐわ}と同時に甘酸^{あまじ}っぱい匂いが、温かくたちこめていた。

幸福であると同時に、なぜか淋しい^{さみ}ような感じだった。両親に守られ、妹たちからもいたわられているにもかかわらず、心細いのだった。

「まるで、恋をしているみたいだわ」

と、彼女は思わず声に出して言ってみた。

もちろん、恋なんてしたことはなかった。でも恋をした娘たちのことなら、いくらでも知っていた。これまでに彼女が読んだおびただしい書物の中に、たくさん恋する娘たちを思い出すことができる。そういう本の中で人を愛したり、恋をしたりすると、どういう気持ちになるのか、いっぱい書かれていた。今の私は、そうした気持ちにそっくり浸っている。

甘くて切なくて、幸福でとても淋しい。そう、とても淋しいのだ。恋をしているからではなく、十七歳にもなるのに恋をしたことがないということが、彼女をたまらなく淋しくさせるのだった。そこで彼女、ジェシー・ロベルタ・カウンは、自分で自分を抱きしめるような仕種^{しぐさ}をして、いっそう強く額^{ひたい}を窓ガラスに押しつけた。

そのころになると、いくつかの家の赤レンガでできたチムニーから、石炭で暖をとるための煙がもくもくと上がりはじめていた。ほとんどの家が石炭を燃やすために、冬の間、空気が汚れ、嫌な臭いが街中にたちこめるのだった。季節が暖かくなれば、暖房もいらなくなり、外の空気もきれいで新鮮になる。そうすれば、喘息ぜんそくのような咳せきの発作や偏頭痛へんずつうも少なくなる。ジェシー・ロベルタ、通称リタはいかかわらず自分の軀を抱きしめるような仕種しぐさをしたまま、階下から響いてくるカウン家の朝の始まりの音に耳を澄ませた。

階下のキッチンに続く食堂では、学校に通う子供たちがあわただしく朝食をかきこんでいた。カウン家の子供たちは、十七歳のリタを頭に、それぞれ三歳ずつ年の離れた妹のエラとルーシー、男の子で末っ子の八歳になるラムゼイの総勢四人である。

長女のリタは、病弱ということもあって、物静かな、どちらかといえば大きな哀かなしそうな眼をした美しい娘。

それと対照的なのがすぐ下の妹のエラで、積極的な行動派。言動も十四歳としてはかなりのおませさん。何かというと姉に対抗するようなどころがある。

三女のルーシーは、頭の回転の早いお転婆てんぱな十一歳。二人の姉たちよりも、もっぱら弟を家来に外を駆けまわるほうが性にあっている。末っ子のラムゼイは幼いながらも、自分がカウン家の後継者であることを自覚しており、良きにつけ悪きにつけ、スコットランド氏族クランの血が色濃くその幼い身体の中に流れているのが、めだつ。

「あら、リタ、今朝は早いのね」

と、いち早く姉の姿を食堂の入口にみつけたエラが眉を上げた。

「そんなにびっくりすることないでしょ」

そう答えておいて、リタは末っ子のラムゼイの頬に素早くキスをして、「おはよう、私の小さな可愛いクラン殿、今朝はご機嫌いかが？」

と、やさしくからかった。

「お姉さんのお気に入りのヤンチャ坊主は、宿題をやり忘れたので、今朝は学校へ行きたくない気分みたいよ」

父親からチャビーチークの愛称で呼ばれている三女のルーシーが、その愛称の由来であるぼっちゃりとした頬に笑窪を刻んだ。

「宿題をやっていかないと、どうなるの？」

カリカリに焼けたトーストに、バターを塗りながらエラが弟に訊いた。一家の主人のカウン医師は、四つに折った朝刊からずっと眼を離さない。そして、子供たちの母親、ミセス・カウンは、小太りの軀でキッチンと食堂の間をフライパンや、熱いポットを手は何度も往復している。ときどきカウン医師が朝刊から眼を上げて、ひとりりで忙しがっている妻を眺めると、娘たちに小言を言う。

「この家には娘が三人もいるというのに、なんでお母さんだけが働かねばならんのかね。お母さんはメイドじゃないんだ」

すると、たちまち食堂の中は蜂の巣を突つついたような騒ぎになる。

「だって学校に遅れてしまうわよ、お父さん」

と、ルーシーが丸い頬をいっそう丸く膨らませ、「それにうちの子は娘三人だけじゃなくて、男の子もひとりいるんですからね。ラムゼイだけがいつも王子さまみたいに特別扱いされるのは不公平よ」

「うちには特別扱いされている子が、ほかにもうひとりいるわね」

と、エラがナブキンで口のまわりを拭いながら、チラッとリタを見る。「ちょっと咳をしたり、頭が痛いといえ、ピアノを弾く以外になんにもしないでいいんですものね。学校へも行かなくてもいいし、家事も手伝わなくてすむし、あたしも病弱に生まれつけばよかったわ」

「エラ」

と、娘たちの母親がたしなめる。「そんなこと言うものじゃありませんよ。健康がどんなに素晴らしいものか、風邪ひとつひいたことのないあなたにはわからないのよ。それは神さまが子供たちにくださる一番の贈りものだわ」

それから彼女は長女のほうをむいて言った。「あなたには、神さまは別の贈りものをくださったのよ。強い心。強くてフェアな心」

「あら、お姉さんの心は強くないわ。とてもやさしいわよ、マミー」

スクランブルド・エッグをフォークですくい上げながら、ルーシーが横から言った。

「そうですよ、ルーシー。強い心をもっているひとだけが、他のひとたちにやさしくしてあげることができるよう。リタは体が弱いけれど、その弱い体を心の強さで補うことができるわ」

「じゃ、あたしたちは頑丈だけどやさしくないっていうのね。ママ？」

「もうやめて、エラ」

リタが片手を伸ばして、斜め前に坐っている妹の腕に触れた。

「いいのよ、あなたたちが学校へ行った後、私がママの手伝いをするから」

「ほらほら、また始まった。そうやってお姉さんはいい子ぶるのよ」

「エラ、止めなさい、もういい」

カウンセ師が音をたてて新聞を畳^{たた}んだ。

「わしはおまえたち三人に、お母さんの手伝いをしなさいと言ったんだよ。罪のなすりあいをしてはいけない」

「四人よ、ダディ。何度も言うけどラムゼイもうちの子よ」

ルーシーは、あくまでもこだわった。

「ダディは女の子って言ったんだ。女の子は三人だよ」

ラムゼイが口の両側にミルクを白くつけたまま、すぐ上の姉にむかって舌を突きだした。

「ラムゼイには、ほかの用事を考えているよ」

と、カウンセ師は穏やかに言った。「まず、学校から帰ったら、まだ明るいうちにタイニーを散歩に連れていくこと。帰ったら水をやってもらいたい。犬の世話はおまえにまかせるよ」

「それだけなの？」

ルーシーが口を尖^{とが}らせた。「あたしなんて家中のお皿拭^かいて、家中の窓を拭いて、家中の床にワックスかけなくちゃいけないのよ」

「あわてなさんなよ、チャビーチーク。春になったら、ラムゼイの仕事が増えるんだから。芝刈りを頼むよ」

「ちえ、くそいまいましい春なんて、来なければいいんだ」

ラムゼイは小さな声で悪態をついた。

「ラムゼイ・カウン」

と、父親はそこで少し厳きびしい声を出した。

「今、きみはなんて言ったのかね？」

「……。つまり、その、春があんまり早く来ないほうがいい、と思います」

ラムゼイは赤くなって、首をすくめた。姉たちがどっと笑った。

「あら、大変だわ。学校に遅れちゃう」

エラが食卓から飛び上がった。それを合図に、カウン家の朝の食事が終わった。学校へ行く子供たちはあわただしく両親に、行って来ますのキスをして、ばたばたと出て行った。いつもと寸分ぶん変らぬ食卓の光景であった。

母親を手伝って食卓を片づけているリタを、父親はじっと見守った。他の子供たちがいる時とは少し違う。サミュエル・カウン医師は、自分が、他の子供たちより長女のリタに対して、特別の感情を抱いているのを知っており、それを誰にも気づかせまいとするあまり、いつも少しだけ彼女に対して厳しかったり、よそよそしかったりしてしまうのだった。

もちろん、自分の子供であればどの子も可愛い。わけへだてなく育てたいと思う気持はどんな親にもある。

けれども親だって人間だ。気の合う子もあれば、その合わない子だっている。医師という職業を天職と信じて生きてきたサミュエル・カウンにしても、例外ではない。彼は自分の四人の子